

第106回 弘前医学会総会

〔日時：令和5年6月3日(土) 14:00～〕
〔会場：プラザホテルむつ〕

一般演題抄録

I-1 当院発熱外来における新型コロナウイルス感染症診療

○町田光司
(医療法人白鷗会まちだ内科クリニック)

当院の発熱外来は、廃院となった「まちだ眼科クリニック」の外來スペースを利用して令和3年1月から開始した。当時の【発熱診療等医療機関】の施設要件では発熱患者の受診に係る動線が分かれている事が明記されており、旧眼科クリニックは出入口、トイレ、待合室、診察室、処置室や視力検査スペースが広く5ベッドを確保して陽性者隔離室とした。患者の対応は月～金曜日は午前20人、午後20人、土曜日は20人とし、日曜祭日も8時から10時まで20人として年中無休で診療に当たった。

令和3年には3月に最初の陽性者が出て以来、3・4・5月で計6例、7・8・9月に11例と計17例であった。令和4年に入ってオミクロン株の出現と共に感染は爆発的に蔓延し、令和4年1月から令和5年4月末までで、外來数は10101名、陽性者は4160例(41.2%)に達した(インフルエンザは770例)。特に第7波の8月は1118名中697例と陽性率62.3%に達し、12月も977名中575例(58.9%)であった。令和5年に入って陽性者が激減して陽性率は20%以下で推移したものの陽性者は切れ目なく続いた。陽性者4012例中、男性1835例(46%)、女性2177例(54%)、年齢層は0～9歳667例(17%)、10代604例(15%)、20代447例(11%)、30代571例(14%)、40代583例(15%)、50代447例(11%)で計3319例(83%)が60歳未満であった。

陽性者のワクチン接種率は68.7%であったが、特に中年以降の基礎疾患のある患者では発熱が少ない傾向が見られた。流行期別の症状では第6波(オミクロンBA2)に比べ、第7波第8波(オミクロンBA5)の方が発熱、咳、咽頭痛等の症状が強い傾向が見られた。

来院患者の地域別では、当院の診療圏である3km以内の患者は36%程度と少なく、他地区や近隣の市町村からの新規患者が多く見られた。その他、死後検死時に検査した6例中、2例に陽性が見られた。

コロナとインフルエンザの同時感染はA型2例、B型1例であった。また、インフルエンザA型B型の同時感染も1例見られた。インフルエンザは令和4年12月に53例、令和5年1月に72例、2月に235例、3月に242例、4月に168例で計770例であったが、コロナはインフルエンザの増減と逆相関的傾向が見られた。

この間、自他の入院や介護施設で多くのクラスターの発生を見たが、経口抗ウイルス剤の積極的な投与が極めて有用であった。主にモルヌピラビルを投与していたが(730例)、今年2月からエンソレルビルも投与を開始し(120例)有効であった。今後とも感染拡大防止、特に後遺症予防の観点から積極的に投与すべきと考えられた。